

いちご「スカイベリー」の摘花による品質向上技術の 確立

要約

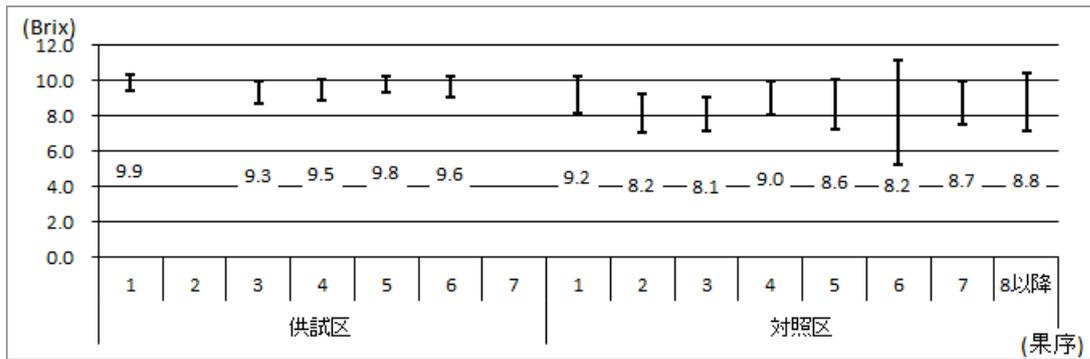
頂花房から二次腋花房において、各花房 5 花(果)残しによる摘花を行った結果、株当たりの収量は減少したが、くすみ果の発生は少なくなり、二次腋花房までの平均 1 果もほぼ 20 g 以上となった。一次腋花房及び二次腋花房では、平均糖度も安定しており、摘花(果)による果実品質の向上効果が認められた。

○ 展示のねらい

いちご新品種「スカイベリー」の果実品質については改善傾向にあるが、個人差が見受けられる。今後の普及拡大を図る上で、果実品質の向上が必要であるので、摘花(果)による品質向上を図るとともに、導入による経営効果について実証する。

○ 主な成果

図 1 一次腋花房の各果序ごとの平均糖度



一次腋花房では、供試区は各花序で 9 度以上となったが、対照区については、第 1 果・第 4 果を除き、9 度を下回り、全体に供試区より低くなった。

表 1 果序ごとの平均 1 果重

		第1果	第2果	第3果	第4果	第5果	第6果	第7果以降
頂花房	供試区	61.4		47.9	44.1	37.9	33.1	
	対照区	66.9	51.0	50.1	37.3	32.1	33.3	30.7
一次腋花房	供試区	73.0		50.1	40.7	36.2	28.1	
	対照区	70.4	48.8	43.3	37.6	31.8	29.9	22.2
二次腋花房	供試区	52.9		32.1	24.7	23.1	18.7	
	対照区	49.3	32.5	26.9	21.7	18.0	16.9	14.2

平均 1 果重については、花序が進むと減少する傾向が見られたが、供試区では、二次腋花房の第 6 果でも 18.7 g となった。対照区では、二次腋花房の第 5 果以降で 20 g 未満となった。

○ 今後の方向性

摘花(果)により、くすみ果の発生減少や、1 果重の増加、糖度の安定など、果実品質の向上が認められるが、果実数が制限されることで、まだら果やへた元の着色不良果の発生によるロスの影響がより大きくなる。そのため、まだら果の発生抑制対策である、施肥管理及び温度管理の徹底を確実にを行う必要がある。

実施機関： 塩谷南那須農業振興事務所経営普及部 実施場所： 那珂川町

問合せ先： 栃木県農政部経営技術課技術指導班 TEL 028-623-2322 FAX 028-623-2315